

ありがとうを伝えたい

ボランティア活動の足あとと、その先の一步

ボランティアあみものグループ

1978年に設立し、43年もの長きにわたり活動を続けた手芸ボランティアグループです。

編み物が好きな人同士が集まり、おしゃべりに花咲かせながら、たくさんのニット製品を作り上げてきました。立ち上げの頃には、毛糸を購入するのにも資金面で苦勞をしていましたが、最近では、地域の方からも温かい寄付をいただくことも多く、多様な毛糸で、セーターやベスト、ニット帽や、ミトン、靴下…どんなものでも編むことができました。半端な毛糸があれば、いろんな色を織り混ぜつつモチーフを作ります。そのモチーフを繋ぎ合わせて、大きなベッドカバーを作り上げ、高齢者施設に寄付したこともありました。

活動の中で編んできたニット製品は、1年に一度、福祉まつりのバザーで販売し、その売上金は毎年、社会福祉協議会へ寄付されます。今では、ニット製品も高価で貴重なものになっていますので、バザーでの販売は大好評。毎年この機会を楽しみにしていた方もいたほどです。

オーダーメイドの注文も受けたことがありました。小柄な男性から「市販の紳士物ニットでは、サイズが合うものがなく困っている。」とご相談を受け、体型に合ったニットを編み上げました。



丁寧に、一つひとつ仕上げます

グループ おもちゃ箱

1983年設立、こちらも活動期間の長い団体です。

就学時前の子どもたちの発達支援事業「子ども発達センター」（旧あゆみ学園）から依頼を受け、療育で使う布のおもちゃ作りを長年続けてきました。団体名の「おもちゃ箱」も、それが由来となっています。おもちゃだけではなく、あゆみ学園に通う園児一人ひとりのオリジナルの名札もフェルトで作りました。

以前、総合福祉センターの入り口の暗いイメージを払拭するため、入り口を明るくするようなタペストリーの製作をお願いしました。季節ごとに楽しめるようにと、四季それぞれの風景を表現した4枚のタペストリーを作ってくださいました。新春には椿の花、初夏になれば水芭蕉が咲いています。総合福祉センターにご来館の折には、ぜひ立ち止まって見てみてください。最近では障がい者施設で織った裂き織の布地で、ポーチやバッグなどを製作しました。団体と施設の交流の中で、ご自身が織り上げた布がポーチなどの製品になった姿を目にし、施設の皆さんもとても喜んでくださいました。



きんちゃくとエコバック
一つひとつが手作りです

その喜びを目の当たりにすると「いい物に仕上げよう」という心持ちになります。他にも、「放課後等デイサービス」で染めた藍染めの布地で、エプロンやエコバッグ等の製作もしました。染め上がった布地から、何を作るか、柄が映えるように、無駄が出ないように、裁断するにはどうするか、生地とにらめっこしながら、いろいろと考えるのも大変な作業です。

いずれも作品を商品として仕上げる工程を担っていましたが、目では見えない部分で長く使ってもらえるようにと、さまざまな工夫をして、気持ちのこもった丁寧な作業をされていました。その姿勢は、敬服に値します。